

L02a 2014年ほうおう座流星群の遠征観測

渡部 潤一 (国立天文台), 佐藤 幹哉 (かわさき宙と緑の科学館), 佐藤 智子, 戸田 雅之 (日本流星研究会), 土屋 智恵 (放送大), 藤原 康徳, 植原 敏, 木下 正雄, 嵯峨山 亨 (日本流星研究会), 戸田 博之 (国立天文台岡山), NHK コズミックフロント取材班

1956年12月5日、南極観測船「宗谷」において第一次南極越冬隊が、インド洋上で一時間に300個という流星雨の突発出現を観測した (Huruhata & Nakamura 1957)。ほうおう座流星群である。ところが、その後は全く出現しない状態が続いた。母彗星は1819年に姿を見せた周期5年ほどの木星族彗星 D/Blanpain (1819 W1) と思われたが、こちらも長く行方不明になっており、どちらの意味でも “幻の流星群” であった。

その後、この彗星と軌道が酷似した小惑星が特定され、弱いながらも彗星活動も確認され (Jewitt 2006)、周期彗星として 289P/Blanpain と登録された。この軌道をもとにダストトレイル理論を適用し、1956年の大出現およびそれ以降の出現しない状況が説明できた (Watanabe et al. 2005) が、同時に2014年12月1日から2日に出現する可能性があることもわかった (Sato & Watanabe 2010)。予想ピークは日本時刻で午前8時から10時であったため、われわれはスペイン・カナリー諸島ラパルマ島、テネリフェ島山頂の欧州北天天文台およびアメリカ東部バージニア州ノーフォーク付近へ観測隊を派遣し、この流星群の光学観測に成功した (NHK コズミックフロント 2015年1月15日放送)。

本講演では、その遠征観測の成果の概要について発表する。